書　評

松本　幸男　著

『建国初期アメリカ財政史の研究』

下山　晃*

大学院研究生という一種奇妙な身分でアメリカ商業史の研究をはじめた頃，何冊かのアメリカ経済史関連の本格的研究書を細かく解剖するように精読したことがある。田島恵児『ハミルトン体制研究序説』はその内の一冊であったが，間もなく2度にわたる同書の合評会に参加，田島氏が『社会経済史学』誌で同書に対する「章評」を諌めた一文がなかなか印象的だったことも加わって，ハミルトンの政策や人物像については一時ながら，評者は格別な関心を持つことがあった。

その頃以後，ポストベラム期以後のアメリカ財政史については，齋藤忠雄，片桐正俊，河音琢郎，池島正興ら各氏の業績やアメリカ金融史，アメリカ経済史の通史的研究書でかなりの知識を得ることが出来たが，植民地時代から独立革命期，建国期，アンテベラム期のアメリカ財政史・金融史研究は思いの外多くはないことを改めて感じさせられていた。日頃の評者の不勉強の所為でもあろうが，寺地孝之『近代金融システム論』，浅羽良昌『アメリカ植民地土地銀行史論』『アメリカ植民地貨幣史論』以外では今でも，田宮晴彦，林寛美，肥後本芳男三氏ら数人の研究者の論稿が目に入る程度である。そこにこの度，田島氏の教えを受けた松本幸男氏の『建国初期アメリカ財政史の研究：モリス財政政策からハミルトン体制へ』が上梓され，書評執筆のご依頼を受けた。そうした関わりがあるため，格別な懐かしさと共に，強い緊張感を感じている。

ご本をいただいてまず第一に頭に浮かんだのは，モリス財政政策についての恐らくは最初の本格的研究書といえるW.G.Sumner の *The Financier and the Finances of the American Revolution*（1891）であった。著者松本氏は手堅く，その本のリプリント版（1970）を参照されている。章立てや項目構成でSumnerと本書ではモリス・ノートの考察など多くが重なっているが，図表一つを比べてみても（Sumner，vol.2 p.149，松本34頁），本書はモリス文書など一次史料も十分に活用しながら，Sumner以上に一層精緻な分析も展開しており，著者の慎重で生真面目な研究姿勢が窺い知れる。田島氏の著作やSumnerと比較しながら本書を一読してまず最初に感じたのは，一歩一歩地道に課題に挑んだそうした著者の丁寧な仕事ぶり，手堅さを重んじた姿勢である。

本書の構成と各章の要点については「はしがき」と「序章」で著者自身が要約を行なっているが，大きくは第2章以下第8章までの第1編「連邦共和国政府形成の動き」と第9章及び二編の補論から成る第II編「連邦共和国政府の成立」の二部構成となっている。一冊の本格的研究書の組み立てとしては若干，バランスの悪い感じは否めない。「補論」で済ませず従来のハミルトン研究や独立革命論の蓄積成果との関わりの中でさらに幾つかの独立した章での自説の展開が望まれたのではないだろうか？ハミルトンといつも対照的に論じられるジェファーソン関連の研究業績が数多く出ていることに鑑みれ

*下山　晃（Akira SHIMOYAMA）：大阪商業大学総合経営学部教授。日本大学大学院商学研究科博士後期課程単位取得満期退学。『世界商品と子供の奴隷：多国籍企業と児童強制労働』ミネルヴァ書房，2009年；『毛皮と皮革の文明史：世界フロンティアと掠奪のシステム』ミネルヴァ書房，2005年；「＜悪魔の染料＞インディゴが変えた世界」（『農業史研究』第41号，2007年）など。
shimosan@daishodai.ac.jp

ば，そのジェファーソン体制との関わりの中でのモリスの位置づけなどについても，著者は独自の見解を多く述べ得た筈である（もっとも，この点については著者は第 9 章第 4 節などで「今後の課題」とするものと認識している）。さらに「無いものねだり」を承知で付言すれば，当時のアメリカ財政思想に大きな影響を与えていた筈のジャック・ネッケル，ロバート・ウォルポール，アルバート・ギャラティン等の政策構想との関連なども，更に本格的に論じられることが望まれただろう。第II編が「補論」を付け加えたような形になって構成されてしまっている為，全体的にはどこか隔靴掻痒といった不足感がどうしても残ってしまうのである。もっとも，いま上に連ねた幾つかの要望は，日頃問題やテーマをなるべく広い視野から論じたいと思っている評者の差し当たっての読後感による「無いものねだり」であるため，手堅さを第一義に示された著者には「読み流し」で済ませていただいて何ら差し支えはない。

本書の骨子は「モリス財政構想とハミルトン財政政策の連続性の解明」（p.3など）とされているが，ごく一般的に言って，ハミルトンがモリスの直接的な影響を大きく受けていたことは植民期アメリカの研究者の間では恐らくよく知られた事実である。その点，著者の記述は謙虚というか，説明が不十分に過ぎるところがある。ハミルトンが「モリスの若き弟子」とみなされるのはごく自然なこと（Thomas J. DiLorenzo, *The Corrupt Origins of Central Banking* のサイトなど参照）であるし，モリス，ハミルトン共に愛書家の集まり「火曜倶楽部」で親しく交わり，詩歌や絵画，ビール醸造，フェンシング関連の著作を多数保有したモリスはハミルトンに「Merry Makefun」と親しく愛称で呼ばれていた（Wolf, Edwin II, “Great American Book Collectors to 1800.” *Gazette of the Grolier Club*, n.s., no.16 (June 1971) : 3-70. Kitty, M. Barton, “Benjamin Franklin and Eighteenth-Century American Libraries.” *Transactions of the American Philosophical Society*, n.s., 55, pt.9.)。こうした点から鑑みて，本書の意義は単に「モリス構想とハミルトン体制の連続性の解明」ではなくて，「ハミルトン体制の直接の下地となったモリス構想の具体的な内容にわが国でははじめて体系的に詳細な実証分析を加え，独立革命期アメリカの公信用形成の歴史過程を詳細に検討した」ことであったと言える。今も陰に陽に様々な問題を抱えるアメリカの実質的な中央政府権限の不十分さ，歪さを歴史的に考察しようとする際にも，本書は数多くの示唆を与えることになる。

課題，分析視覚と研究史が序章で示され，第１章でアメリカ植民地経済の発展がごく簡単に概観された後，第 2 章「モリス財政政策」から本論がはじまる。そこではまず，大陸紙幣の価格維持が独立革命遂行に重要な比重を占めていたものの各邦の思惑の食い違いから減価をとどめられず，紙幣発行主体である大陸会議の権限強化なしには「危機の時代」は回避できないと認識した愛国保守派層の要望からモリスが財務総監となった経緯が述べられる。同章第 2 節「モリス財政政策の展開過程」は「政策目的」「政策諸手段」「政策展開過程」の検証で，「政策展開過程」は（１）国立銀行政策，（２）正貨分担金調達政策，（３）モリス・ノート，（４）外国借款調達政策，（５）公債確定政策，（６）国立造幣局設立政策，（７）戦時行政機構改革政策が順次紹介・分析されている。この内（１）は第３章，（４）は第 4 章，（５）は第 7 章，（６）は第５章においてさらに具体的な考察が加えられる。第 6 章はモリスの「公信用に関する報告書」の一次史料分析である。第 8 章「いわゆる危機の時代」については，第 1 章の淡白に過ぎる記述を思うと，むしろ第 1 章に組み込んで，モリス

財政政策の歴史的背景として論じられるのが妥当だったように思える。

上に一覧した通り，本書はモリス財政の背景，政策内容を特に政策展開過程の具体的な分析から実証的に考察したものである。政策手段に関してまとめられた「モリス財政政策の構想」（第２－１図）はモリス構想の全体を見渡した著者ならではのものであるが，モリス・ノートの発行や軍需品請負制の立案には元々，奴隷貿易や兵器調達に大きな利害を持っていたモリスの特異な立場が関わってはいなかっただろうか，政策諸手段の各項目について一層踏み込んだ著者の考察が知りたいところである。政策展開過程に関しては，難題となることを自覚されてか，近年論争となっている幾つかの問題については注記にとどめる（第２章注２，注16）といったこなれた処理がなされている。評者は第二合衆国国立銀行と毛皮商人・武器商人・土地投機商人のジョン・ジェイコブ＝アスターとの関わりを調べたことがあるため，第３章の「国立銀行政策」は特に興味深く読ませていただいた。いわゆる「双子の赤字」の累積問題を思い起こしても，FRB設立の怪しげな経緯を振り返ってみても，また小切手不渡りや銀行倒産が日常茶飯という現状に鑑みても，アメリカの財政，金融，税制は今でも「信用と公正な権威のある中央政府」の存在を疑わせる実情を内包しているように思えるが，第二「国立」銀行はアスターら有力商人の投機と詐欺に利用される一面があった。それに対してモリス構想は，少なくとも建前としては「私的利害の絆によって諸個人をより一層強く普遍的な大目的に結びつけることを志したもの」（60頁）であり，第二国立銀行とはいわば公私のベクトルが対照的な向きをなしていたことが印象的である。モリスが「北アメリカ銀行設立案」を連合会議長宛てに提出した翌年，1782年にサミュエル＝アダムズがジョン＝ロックの言説を強調して「クリスチャンとして，人として，第一にはライフ，第二にはリバティ，第三には財産，自然な自由こそは地上の至高のパワー」と演説した時，ハミルトンはジェファーソンらと共にそうした理念を実現する国としてのアメリカ建国の必要性を共有したが，農業基盤の南部諸州は自立的な州権維持に強いこだわりを持ち続けたため，外交，軍事，各州間調停に中央政府は相当程度の権限を有したものの各州への課税権限や指導権は（通信交通の未発達もあり）無いに等しい状況であった。ハミルトンは梃子としての関税政策とウィスキー課税で国家の「health and wealth」を保持することを説き，政府と私人保有のジョイントで連邦銀行を構想するに至るが，そうしたハミルトンの企画の原型はすでにモリス構想にあることが本書から具体的に詳細に辿ることが出来る。まさに，「Founding Fathers は Funding Fathers」でもあった（Smith, Bradley, *The USA : A History in Art*. Crowell, 1975, 98-99）ことが確認出来る訳である。

第４章は短かな章であるが，植民期アメリカの金融業や奴隷貿易，毛皮交易で非常に大きな勢威を示していたオランダと草創期アメリカの結びつきを経済史研究の観点から切り込んだ貴重な考察といえる。土地投機会社との関連においてのみ論じられてきたオランダの投資が，実は当時の新興アメリカ財政の根幹にも関わっていたことを本書は指摘している。海外からの投資が時に７割，８割の比重を占めたことは多くの建国期アメリカの銀行の共通した特徴であったから，この章が欠けていれば本書の手落ちとなった筈である。

第５章～第７章は一次史料（モリスの国立造幣局及び公信用に関する報告書）の詳細な分析とその反響の分析で，本書の専門書としての水準を示す章である。著者は本書の中で何度もモリス構想とハミルトンの財政政策の連続性を強調されているが，この諸章はむしろ両者の間に

様々な紆余曲折や意見の食い違いもあったことを浮かび上がらせている。スミス，スチュアートらの経済理論との関わりの変遷や各邦の対応の多様な動きもよく伝わってくる。

補論で特に着目されているのはハミルトンによる自由鋳造制度の提案であるが，この自由鋳造制度こそは実は，「無政府状態にさえ陥りつつあったアメリカ」（ラファイエット宛て書簡に記されたワシントンの嘆き）の財政を比較的長期にわたって安定させた時宜を得た選択肢であった（E.Groseclose, *Money and Man: A Survey of Monetary Experience*. Univ. of Oklahoma Press, 1976, p167）。

何度か本書に目を通した後，繰り返し頭に浮かんだ疑問はモリスやハミルトンの「国立」銀行構想の実質的な意味合いである。本書の索引には「中央銀行」という言葉はリストアップされていない。このことの意味は，実は今日の基軸通貨の問題・課題とも深く関わるものと思える。著者松本氏の今後のさらなるご研究の進展に注目したい。

なお，寺地孝之前掲書のほか藤木裕『金融市場と中央銀行』，ロン・チャーナウ『アレグザンダー・ハミルトン伝』などを本書と併せ読めば，グローバル化の中での国家や中央銀行の在り方を考える必要が多くの研究者や政策担当者に喫緊の課題として浮かび上がることにもなる。その意味でも，本書は貴重な業績であったと言えるであろう。

〔刀水書房，2011年，313頁〕

書　評

安武　秀岳　著

『自由の帝国と奴隷制』

森　　杲*

1

本書は見かけ上，著者が近年に発表したさまざまなテーマの論考を一冊の書物に集めた論文集である。収録された論文のいくつかを私は，発表された時点で（熱心にとはとても言えないが）読んでおり，夫々に論旨の見当はついたつもりでいた。白状すると，論旨に好感をもちつつも，その重大性にはさっぱり気づいていなかった。そこにこの度，編集委員会から書評の依頼があり，わりに簡単に書けそうな気がして引き受けたのである。また依頼をいただく前にこの新刊書のために書き下ろされた序章だけは読んでおり，著者の並々ならぬ思い入れと渾身の筆致に圧倒されたので，あらためて全編を読み通すことで新しい勉強ができるだろうと期待してでもあった。

そうしていま全編を読み終えて，読後感は当初の予想とはまったく違うものになっている。これはたいへんな本である。各章は「さまざまなテーマ」の論文と思っていたのが，じつはこの一冊に集成された全体構造を把握する欠かせない各論であったことがわかる。全体構造というのは，独立革命から南北戦争にいたる合衆国建国期の，政治，経済，社会，文化の動きの総体のことである。これまでこの時代の発展を論

*森　杲（Takashi MORI）：元札幌大学教授。北海道大学大学院経済学研究科修了。『アメリカ資本主義史論』ミネルヴァ書房，1976年；『アメリカ職人の仕事史』中公新書，1996年；[訳書]ウォルター・リクト『工業化とアメリカ社会』ミネルヴァ書房など。
mori-t@jcom.home.ne.jp